

古歌にない花

茶道の稽古のなかで欠かせないのが、茶室に飾る茶花を覚えることです。掛軸や道具との取り合わせや、茶事の演出で重要な要素なのですが、私には情けないほどに、花の名を記憶する能力に欠けています。

そこで、なんとか記憶に定着させる方法として編み出したのが、稽古に使われていた花を詠んだ歌を調べてみることでした。

そのなかで気がついたことは、茶道にとって重要な花であっても、平安期より昔の古歌に歌われることが意外に少ないということでした。

■ 水仙の花

たとえば、水仙は唐銅など「真の花入」つまり最も格の高い花入に適した花とされて、茶花として重んじられるのですが、古歌に姿を現すことはまれです。水仙がわが国に到来するのが平安末期と比較的新しく、大和言葉で呼ばれることがなかったため、歌に詠まれる機会が少なかったからなのだそうです。

ギリシア神話にも登場する水仙は、もともと地中海地方の原産で、それがはるばるとシルクロードをたどって唐に渡ると、水辺の仙人になぞらえて「水仙」と名付けられました。

時代がさらに下って、大陸から黒潮や対馬海流に乗って漂着したものがわが国の海辺に自生して、それが大陸で付けられた名前のまま愛でられるようになったのです。

地中海を出自とし、大陸の不思議な名前を持つ水仙は、エキセントリックな存在でもあったのでしょう。茶道で重んじられるのも、この不思議な佇まいが原因ではないかと思います。

侘茶の祖と言われる村田珠光は、それまでの唐物中心の茶の湯の道具に、和物を調和させて新しい美をつくることを目指し、その姿勢を「和漢のさかいをまぎらかす」と言いました。境界を横断するように移動する水仙が、「さかいをまぎらかす」存在として認められているのかもしれない。

茶道は室町時代に萌芽し、近世の武家社会で爆発的に発展したということのを思い起こすと、花の渡来の時期だけではなく、古歌に詠まれる美意識と茶道のそれとは、おのずから異なるのだという当たり前のことにも思い当たります。

さて、近代になってからは、エキセントリックさとは無関係に、花のかたちの可憐さを詠んだ歌が登場します。わたしたちがよく知っている水仙の花の姿です。

真中の小さき黄色のさかづきに甘き香もれる水仙の花
(木下利玄『銀』)

さすがに花音痴の私でも、水仙の名を忘れることはありませんが、歌を通して渡来の歴史、美意識の変遷などに、思いもかけず触れることができました。

■ 牡丹の花

牡丹は花の王と呼ばれるほどに、堂々とした佇まいですが、床の間に飾ると花のまわりの空気がかすかに震えるような幽玄さも持ち合わせています。この花も古歌に詠われることの少ない不思議な花です。

わが国への渡来が遅く、大和言葉で呼ばれることのなかった水仙に対して、牡丹の花は『枕草子』にも姿を現しており、水仙よりも少なくとも二百年以上の古い歴史があります。確かにこの花は「深見草」や「二十日草」といった大和言葉で呼ばれているのです。

大和言葉で詠まれた数少ない牡丹の歌には、次のようなものがあります。

人知れず思ふ心は深見草 花咲きてこそ色にいでけれ
(賀茂重保 『千載和歌集』)

形見とてみれば嘆きのふかみ草 何なかなかのほひなるらむ
(藤原重家 『新古今和歌集』)

いずれも「思ふ心」や「嘆き」が「深まる」意を掛けるものであって、あの堂々とした花の様子を詠んだものではありません。ふるえるような薄い花卉の重なりは、割り切れないころの揺れを思い起こさせたのかもしれませんが。この花が正面から詠まれることが少なかったのも、そのあたりに理由があるように思います。

私にとって牡丹の歌といえば、先にご紹介した木下利玄の次の一首に尽きます。

牡丹花は咲き定まりて静かなり はなの占めたる位置の確かさ
(木下利玄 『一路』)

咲き定まって、これ以上の咲きようがあるのか、と誇らしげに問うているような風情です。しかしながら、その花の占める位置はあまりにも確かで、この世ならぬ世界に通じているかのように感じさせます。古歌に詠まれたものとはまた違う「深さ」を、この歌は詠んでいるように思います。花の王として愛でる大陸の美意識とも違うものが、ここにはあります。

花を詠んだ古歌を鑑賞することは、その花を知るきっかけになりますが、「古歌にない」事実や、歌の変遷をたどることもまた、花について多くのことを語ってくれます。

(所長 瀬戸 英晴)